

ローセキをたずねて

皆川美恵子

私の子どもの頃は、まだクルマの往来が少なく、舗装された道路で、石蹴り、けんば、陣取り、瓢箪鬼といった遊びをしました。いつもポケットに入っているローセキを取り出し、それら遊びの線を白くキチッとひき、ジャンケンをすると、遊びの開始でした。

道にしゃがみこんで、身体中ほこりっほくなりながら、絵だか字だかも、ローセキでさかんに描きました。(しかし、大切なまっ白いローセキは使わずに……)

今では、交通量が激しくなり、歩道と車道は、白線やガードレールによって分けられてしまい、道に佇んだり、道で遊んだりすることは、できなくなっていました。そのせいででしょうか、ローセキを知らない子どもがいるようです。

おもちゃ屋さんに見ると、ローセキは昔ほど出回らない

ものの、今でも少しずつは売れているということでした。しかし、やがて、「チョークなら知ってるけど、ローセキって何、全然知らないわ」という子どもが増えていくことでしょう。

そこで、児童文化探訪第二回目は、子どもたちが道路で遊べた時代のおもちゃ——ローセキをとりあげ、このローセキがどのように作られているのかを探ってみました。

一軒だけ残っていた清水工場

埼玉県の熊谷と秩父の三峰口を秩父鉄道が走っていますが、その途中に長瀬（なげ）という川下りで有名な岩場の景勝地があります。その長瀬より二駅ほど熊谷に寄ったところに、樋口（ひぐち）という駅があります。そこが、おもちゃのローセキを作っているところでした。樋口の駅を下り立つと、すぐに岩田山という山が見えます。ロー

セキは、この山から切り出される自然石なのです。岩田山の麓の人達は、農業がひまになると副業として、昔から、ローセキを掘っていたといえます。しかし、現在ではやめてしまった人が多く、唯一軒、野口さんのところが残っているだけでした。

野口さんのところは、お父さん（明治^{めいし}さん）の代から、ローセキを切り出しています。「おやじが生きていれば、八十二歳になるから、昔のこともわかったのだが……」と、四十五歳になる久寿さんは言っていました。今は、この久寿さんと弟の正巳さんが跡を継いで、兄弟でローセキの清水工場をやっているのです。

「いつ頃からローセキを採るようになったのですか」と尋ねると、昔のことなら、あの人がわかるだろうということで、野村友保さん（五十三歳）の家へ連れていってくれました。

野村友保さんの家で

野村さんも以前はローセキを切り出していたのです。野村さんと野口さんは、いつ頃からやっていたのかな、そうさな……と話し合い、百年位たつのかも知れないなあということになりました。

何しろ、明治二十九年生まれの、野口さんのお父さん（明治^{めいし}さん）が子どもの頃は、もう周りの大人がローセキを掘っていたと

いいます。百年の歴史はないにしても、九十年の歴史はどうやらありそうです。

岩田山は、岩の多いゴツゴツした、馬も入れない岩山だったそうです。みんなは、鉱脈が外に露出した露頭をツルハンで切り起こし、鋸で細かく切って箱につめ、かついで下^{くだ}りてきたそうです。ローセキは柔かいので、鋸で簡単に切れるのです。三分（約九^{cm}）角、長さ二寸（約六^{cm}）の小さな角柱の形にし、千本を一箱にして、二箱位をしょって下りたそうです。重さは、十五貫位ということでした。

野口さんはお父さんから、昔、山から四十貫をしょって下りた人がいるということを知ることがあります。村人が驚いて見つめた、なみはずれた力持の話は伝説となり、父から子へと語り継がれたようです。

本当は滑石（タルク）

さて、野村さんは、ローセキ／＼と言っているけれど、ローセキというのは俗称で、この石は、本当は、滑石^{かつせき}（タルク）という石なのだと教えてくれました。滑石は名のように、なめらかな性質をもった石だそうです。障子や襖の敷居に、ローセキ（滑石）をこすると、襖や障子は、すべりがよくなるといえます。そうい

えば、小さい頃、すべり台にローセキをこすりつけました。その上を下駄で滑り下りようものなら、こわい位にスピードが出たものです。

滑石の粉は、タルカン・パウダーといい、「汗知らず」として使われるそうです。そればかりでなく、白粉、クリーム、咳どめの薬や胃散の増量剤、DDTなどの農薬にも使われているそうです。さらさらと滑らかで、湿気を防ぐ滑石の粉は、本来は医療効果も何もない、無害無臭の粉末です。

この他、銕物、ゴム、樹脂、製紙の工業部門でも大量に使われています。たとえば、ゴムのようなネバネバしたものの製造過程には、その粘りをとめるものとして、タルカン・パウダーはなくてはならないものようです。

チューインガムのまわりに、よく白い粉がついていますが、あれはローセキ（滑石）の粉だそうです。また熱が出た時、頭にのせる水囊やゴム風船についている白い粉も、みなこの粉だそうです。おもちゃ以外に、ローセキは、子どもたちにとってこんなにも身近だったのです。

ローセキ（滑石）はもう一つの名前を持っていました。このあたりの人々は、「オンジャク」（温石）とも呼ぶということなのです。零下十度Cにもなる二月の寒い時、この石を囲炉裏の灰の中

に入れ、暖めてから布に包んで、野村さんや野口さんは、懐炉がわりに学校に持っていったといいます。「教室では、つま先に置いてなあ」と子どもの頃を懐しんで話してくれました。

暖めるとなかなかさめにくいところから、「オンジャク」と呼ばれたこの石は、土地の人々の生活の中から生み出された利用法なのでしよう。今では、茅葺の家がなくなり、従って囲炉裏がなくなり、暖めた石をじっと抱くということもなくなってしまったそうです。

戦後の最盛期

山小屋を作り、岩田山で、おもちゃのローセキを作っていました。都内に電気がひけ、電動モーターが出現するようになると、原石を都内の小石川に持ってゆき、そこで切ったそうです。しかし、やがて秩父にも電気が入るようになると、富田さん、石川さんという人が電動モーターを村に持って来て、工場を建て、村で切るようになったということです。

石川さんが作った工場というのが清水工場で、野口さんのお父さんがそれを譲り受けたわけです。野口さんは、「村に電動モーターの入ったのは、昭和八年八月三〇日だ」と言います。私達がよく覚えてますねと驚くと、清水工場の鍵には、その年月日が

記されているので確かだということでした。

やがて戦争になり、そして戦争が終つてみると、兵隊から帰つても仕事のない人が多く、ローセキを扱出す人が増えたといひます。戦後は、子どものおもちゃといつてもまだあまりなく、安いローセキが手頃だったのでしよう、小売値が一円のローセキは、よく売れたといひます。

最盛期は、昭和二十四年から三十年頃までだったそうです。約二十軒のローセキを扱う業者は、毎日忙しくローセキを切り、問屋におさめたといひます。

中国産の滑石（満タル）

やがてだんだん掘り尽され、山から出る滑石の量が少なくなつてきます。そうなるとやめる人が多くなり、みな商売がえをしていきます。昭和四十年頃のことです。しかし中国から原石が入ってくるようになり、清水工場では、以後、その中国産の石を使つて、ローセキを作るようになっていったといひます。

やめた人は、その中国産の原石を石粉にする仕事へと移つていったといひます。工業が盛んになると、タルクの石粉の需要が増えていったのです。

現在でもいくら岩田山から滑石が採れるそうです。清水工場

の滑石は、九〇パーセントが中国から来たもので、残り十パーセントが岩田山のものだといひます。そして岩田山のものはおみやげ用の細工物にし、子どものおもちゃのローセキには、中国産のものを使うと言つていました。

中国産というのは、満州でとれる滑石（満州タルク—略して満タル）だそうです。満州の鉱脈は規模が大きく、不純物の少ない良質のもので、秩父の石より白く、やや硬めだそうです。秩父の石は柔かく、細工はしやすいそうですが、蛇紋石が入つたりして斑になっています。

野口さんは、おしろい用にもなるという白い良質な満州の滑石を、子どものローセキとして切っています。やはり店に出すと、子どもたちはよく知つていて、より白いものから売れるといひことでした。

野原茂さんの家で

さて滑石とはどのようにしてできた石なのでしょうか、それを尋ねると、地質のことに詳しいのは野原さんだといひことで、早速電話をして、今度は野原さんの家へ連れていつてくれました。

通された部屋の本棚には、鉱物や地学の本が並び、野原さんは、本を一冊手にしながら詳しく説明してくれました。この野原

さんも親の代から滑石を掘っていたようですが、今では石粉の仕事にかわっています。

まず長瀬あたりは、地層としては二つの変成岩地帯がいっしょになっているところだそうです。群馬県の下仁田しもとから鬼石おにを通る三波川系、それに長瀬から小川町を走る長瀬系、この二つの地層が長瀬でつながっているらしいのです。

変成岩地帯というのは、地殻変動が活発な地帯で、そこでは岩石が収縮されたり、のばされたりして餅をついた状態になり、一樣化されて岩石から鉱物にかわっています。そうしてできた鉱物の一つが滑石であるようです。

野原さんは本から詳しい数字を教えてください。純粹滑石は、珪酸が六三・五%、酸化マグネシウムが三一・七%、結晶水が四・八%。しかし純粹のものはまずなく、たいてい一〇〜一五%は不純物を含んでいる。その不純物としては、アルミナ、ニッケル、酸化カルシウム、鉄分などだそうです。

変成岩が鉱物に発達したものの一つが滑石というわけですが、その変成岩は、川に流れこんで固まった水成岩が、造山活動などの大きな地殻の変動を受けて作られたものです。ですから何十万年という長い年月の中で、滑石がつくられたことになりました。一片のローセキには、そういう大きな時間がつまっています。

子どもから警察へ

話を聞いたあと、また清水工場に戻り、工場でローセキを切るところを見せてもらいました。電気鋸で切るローセキの形は、昔と違い、四角柱ではなく、平たい形のものでした。野口さんは、十円(たて56ミリ・よこ19)、二十円(たて84ミリ・よこ19)、三十円(たて82ミリ・よこ19)、あつち5ミリ、という三つの大きさの、おもちゃのローセキを作っていました。

野口さんの話によると、近年では子どもたちより、警察関係者がローセキを使うようになったということです。道路の交通量が激しくなり、裏道にも自動車が入ってくるので、子どもたちはおちおち遊んではいられませんが、交通事故や違反駐車は増加の一途です。その交通取締に、白墨よりは消えにくい、またポケットに入れても汚れることのないローセキが盛んに用いられているのだそうです。

その他鉄鋼所、造船所などで、鉄鋼に印をつけるのに、熱でも消えないところからローセキを使うそうです。

この取材を終えて、ローセキの回り状況を知るため、東京と大阪の大きなおもちゃ問屋さんに連絡を取ってみました。東京の間屋さんは、野口さんのところの製品と、中国からの製品を扱

い、昔ほどでないにしても徐々に売れているということでした。大阪の間屋さんでは、ローセキは価格が安い上に重く、商品としては扱にくいので、今はやっていないという返事が返ってききました。

ローセキの名の起源

さて本当は滑石という石が、なぜローセキと呼ばれているのでしょうか？ ローセキの名の起源はどこにあるのでしょうか？

百科事典を繰ると、蠟石ろうせきという鉱物があることがわかります。蠟のような光沢をもち、見た目も滑石に似ているこの石は、主成分が珪酸アルミナで、滑石よりやや硬いそうです。レンガやタイルなどの原料になるほか、石筆にも用いられるということです。

石筆とは、学制が発布された明治五年以後から、鉛筆が普及する大正十年位までの間、小学校の低学年で用いられた文房具です。黒い粘盤岩で作られた石盤の上に、白いすき透るような蠟石で作られた、丸みを帯びた鉛筆の形のような石筆で、字や数を書き、子どもたちは学習しました。

この石筆は、蠟石の産地として有名な、岡山県の三石地方で作られていたといえます。そこで明治十五年頃から石筆を作っている、岡山石筆株式会社に、蠟石について問い合わせてみました。

それによると、石筆を作った残りのきれっぱしを用いて、おもちゃ用のローセキを作ったことがあるといえます。そしてそのローセキには、赤や緑などの色粉いろこなをまわりにつけたとも話してくれました。

秩父に取材に行った時、野村さんは、次のようなことを言っていました。そもそも岩田山に滑石が出るということを知って、製品化するようになったのは、大阪商人によってではないか、だからこそ戦前の一時期まで、東京ではなく大阪に製品をおろしていたのではないかと、言うのです。大阪の間屋さんに尋ねてもこの辺の事情はもうわからなくなっています。石筆の歴史や産地からして、おもちゃのローセキが関西方面から出たとは大いに考えられそうです。

明治生れの方や、今でもある地方の人達は、おもちゃのローセキのことを、「石筆」とも呼ぶようです。白くて、描くことのできる石は、まず石筆が一番身近にあって、そのかけらがおもちゃになっても、「石筆」と呼んだのでしょう。しかしやがて、それが材質からローセキと呼ばれることになったのでしょう。それが、蠟石ではなく、滑石という石で作られるようになって、「かっ石」とは呼ばずローセキ、ローセキと呼びならわし続けたものと思われまます。